



海に抱かれて

～続・風にのせて～

三島マリコ

序章

---昭和20年の、ある夏真っ盛りのころ。

誠はその青春を、耽美な最期のために捧げていた。---

誠は、長崎の国東半島の、ある港の近くに家族5人で暮らしている。

父方の祖母と両親、そして9歳の弟である。兄が2人いたが、どちらとも戦死した。

港には、海軍の特攻基地がある。

日に日に特攻という、その役目を果たす日が迫ってきている。

特攻には「震洋」と呼ばれるものが使われた。

小型のベニアで造られたボートで人がこれに乗り、中に250kg爆弾を積み、敵艦に体当たりするのである。

実戦に使われれば、たいていそれに乗った者は帰ってはこない。

誠のもとには、なぜだかわからないが未だに「赤紙」は届いてはいない。

先に戦地に赴いた友人は、この小さな港町からも大勢出ている。

妙なことではある。

当然、そのことはしばしば周囲の口草にもなる。

そのことを彼自身も訝っている。

「名誉の戦死を！」

これこそが今の彼の生きる上での唯一の活力であるのだ。

自分も震洋の乗り手としての役割、使命さえ与えられれば、容易にそれは遂げられる。

そればかり考えていた。

誠の日課は、港の両岸にある崖に震洋を格納するための空間を用意することであった。

一人の監視役の下で仲間、といっても自分よりも歳は下ばかりの連中と休みなくその崖を掘り進める。

日中は38・9度まで気温があり、多少掘り進めた洞窟の中だと籠った熱気に頭がくらくらする。

そのような時、誠は海風に当たりたがる。

そもそも作業をしている場所は、港であり、青々とした海が目の前に広がっている。

水平線の遙か彼方には、とうに米粒よりも小さくなった漁船がかすかに見える。

洞窟から出たがるのは、ただ海風に当たり涼みただけではない。

それならば周りの連中と変わらない。

誠がその海に期しているものは、この命が断たれるべき時に手ぬかりなく、まさしく彼が美の象

徴として最期を迎えられる日の到来であった。

死を恐れていない訳ではない。

しかし、ただ世間で言われるところの寿命にしたがって自身も滅する事だけはあってはならないのだ。

そこで言われる寿命は、自分たちが実に窮屈で生きづらい世の中に存在しているかなどには目もくれず、単に目先の動向に一喜一憂するような、この全体主義的な国民を誇りに思う民族の構成員のものである。

連日の戦況報道で、日本の数少ない勝利を喜ぶ人々は確かに、「お国のため」に献身的な奉公に努め平和を願っている、”強き弱者”である。

寿命といっても状況が状況であるから、途中で断たれる時が来る時もある。

しかし少なからずこの戦が終わりを迎えば、それぞれの寿命を生きることになる。

それが誠には耐えられなかったのである。

何故だろう。

自分がこのようなひねくれを言うようになったのは。

海に抱かれて ～続・風にのせて～

<http://p.booklog.jp/book/23687>

著者：三島マリコ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/misima-mariko/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23687>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23687>